



SCTE TechExpo26
及び
各種施設・事業所視察
調査報告書
(サンプル)

2026 年 10 月 6 日
OSS BroadNet Inc.

目次

1. SCTE TechExpo26 の全体傾向	4
2. TechExpo26 第一日目 (9/29)	8
2.1 Aurora Networks	8
2.1.1 企業概要	8
2.1.2 展示内容・考察	8
2.2 Harmonic	11
2.2.1 企業概要	11
2.2.2 展示内容・考察	11
2.3 Vecima	14
2.3.1 企業概要	14
2.3.2 展示内容・考察	14
2.4 Spectrum	18
2.4.1 事業概要	18
2.4.2 展示内容・考察	18
2.5 KAON	23
2.5.1 事業概要	23
2.5.2 展示内容・考察	23
2.6 Calix	25
2.6.1 事業概要	25
2.6.2 展示内容・考察	25
2.7 Sagemcom	28
2.7.1 事業概要	28
2.7.2 展示内容・考察	28
3. TechExpo26 第二日目 (9/30)	30
3.1 Nokia	30
3.1.1 企業概要	30
3.1.2 展示内容・考察	30
3.2 AOI	33
3.2.1 企業概要	33

3.2.2 展示内容・考察	33
3.3 SCTE, Cable Labs & Kyrio	36
3.3.1 団体概要	36
3.3.2 展示内容・考察	36
4. Comcast Network Center 視察 (9/30)	37
4.1 企業概要.....	37
4.2 視察内容・考察	38
5. KQED 社視察 (10/1)	40
5.1 概要.....	40
5.2 視察内容・考察	41
6. シリコンバレー視察 (10/1)	45
6.1 Google Visitor Experience	45
6.1.1 企業概要	45
6.1.2 視察内容・考察	46
6.2 Apple Park Visitor Center	47
6.2.1 企業概要	47
6.2.2 視察内容・考察	47
7. その他	48
7.1 BART (バイエリア高速鉄道) への試乗	48
7.2 Waymo (無人自動運転タクシー) への試乗.....	50

購入者の属する組織内での報告以外の目的での本書の複製・配布・流用・加工を禁じます。
表現の簡便の為、本書中に登場する各企業様の社名への敬称は、全て省略しております。
同様の理由から、各社の登録商標・商標への®または TM マークの付記は、全て省略しております。

1. SCTE TechExpo26 の全体傾向

2026 年は一昨年の開催地に戻り、米国ジョージア州アトランタ市内 GWCC での開催となった。1,500 近くの会社・団体が参加、ブース出展は 300 超と、一昨年、昨年に続き、ほぼ同規模となった。



SCTE の本業である啓蒙教育強化を除いた今年の公式テーマは、AI ドリブンネットワーク、ネットワークコンバージェンス（無線との融合）、ファイバーエクステンションの 3 つ。討論・発表分野としては昨年に引き続き、ネットワークエッジ部のインテリジェンス化、DOCSIS4.0 関連、PON の高速化、Agentic AI、FWA、ネットワークのソフトウェア化に特にスポットが当たっていた印象だった。

昨年の TechExpo25 では Unified DOCSIS 4.0 やスマートアンプなど「エッジハードウェアのインテリジェント化」が最大の焦点であり、将来の Next Gen DOCSIS や 50G-PON に向けた技術的フィージビリティの確認が中心であった一方で、今年の TechExpo26 ではこれらの各ハードウェアが市場に定着したことを前提とし、ネットワーク全体の制御・運用を自律型 AI（Agentic AI）やクラウド化ソフトウェアで統合する「自律運用」へと明確に方向性がシフトしていた。単なる技術のスペックアップから AI による自律最適化とインフラ統合へと、展示各社の切り口の変化が顕著であった。

AI ドリブンネットワークとしては、昨年の「スマートアンプによる雑音・トポロジー自動管理」という個別デバイスの自動化を超え、ネットワーク全体に意思決定・自律修復能力を持たせる Agentic AI の実装展示が主役となっていた。

Harmonic は”cOS SensAI™”を展開、従来の障害検知（PNM）にとどまらず、マルチベンダ

一環境のテレメトリデータを AI が能動的に解析し、自律的に帯域調整やノイズ抑制を行うデモを披露していた。

Vecima はエッジ・アクセス網向けの運用自動化スイートを出展、障害予測に基づき現地作業者を出動させる前にソフトウェア上で自動復旧を試みる”Predictive Operational AI”機能を統合した運用概念を展示していた。

Nokia はネットワーク運用・保守プロセスを自律化する”Corteca AI”プラットフォームを中心に据え、トラフィック予測や省電力制御の自動化イメージを提示していた。

Calix は同社の”Calix One”の付加機能として、自律型 AI エージェントが加入者の宅内体感品質（QoE）の低下原因をリアルタイムで特定・最適化する機能を展示していた。

ネットワークコンバージェンスとしては、HFCと PON、さらには CBRS/FWA や Wi-Fi7/8、5G/6G 等の無線迄を同一の管理・運用プラットフォームに収斂（コンバージェンス）させる動きが加速していた。

ヘッドエンドや伝送機器分野では、昨年に引き続き各社が鎬を削っての展示であったが、目を転じて宅内端末分野では、Vantiva と Sagemcom が HFC/PON 双方のバックホールに対応する統合 HGW を出展、Wi-Fi 7/8 統合管理とクラウド運用ソフトの統合運用イメージを展示していた一方で、Kaon は宅内メッシュ Wi-Fi と CBRS/FWA 固定無線アクセスを統合的にローミング・制御する管理ソフトウェア寄りの展示であり、何れも最新の〇×規格にいち早く対応します的な展示内容から、運用管理面の効率向上への方向性の転換を感じさせる内容であった。

ファイバーエクステンションとしては、10G-PON (XGS-PON) の本格普及から 50G-PON への移行ロードマップ、および、集合住宅や難視聴地域への効率的な光延伸ソリューションが各社より展示されていた。

AOI は、高出力かつ広帯域な 1.8GHz / 3GHz 対応の光トランシーバモジュール群に加え、50G-PON 用 QSFP-DD/SFP-DD 光学素子を出展、一方で ATX は、D4.0 ノードから FTTH へのスムーズな移行を後押しする”GigaXtend”ファミリーを出展。両社共、敷設済みの既存ハウジングを交換する事なく、内部モジュールの交換・組替による各種 PON への拡張イメージを提案していた。

新生 Aurora は、高密度アグリゲーション用 100G/400G コヒーレント光通信技術と、これを応用した従来のノードアンプを代替するコヒーレント PON ノードによるファイバー延伸コンセプトを展示していた。

その他の目立った展示としては、Harmonic の”Living Broadband Magic”をブーステーマに、”Magic”に掛けたハリーポッターのイメージが会場内で一際異彩を放っていた。内容としても OLT/ONU(ONT)のオープン化コンセプトである”Open ONT”、MDU 向けの柔軟な高速化手法である”SeaStar”など、独自の切り口が注目を浴びていた。

Vecima は GAP への取り組みを前面に押し出した展示が秀逸で、特にハウジングの標準化概念である GAP(Generic Access Platform)の Tier-2/3 或いは集合住宅向け小型版”Compact

GAP”の展示が筆者には興味深く、検討開始からコンセプトがブレ続けたにも拘らず、一周廻ってしぶとく生き残り続ける GAP の意義を改めて考えさせられた。

Nokia は、50G-PON 分野でのアドバンテージを誇示しつつ、コヒーレント光通信技術をいち早く製品化した 800GHz までのシームレスな高速化のロードマップと、組み変わっていく PON 機器の構成を AI により自律的に管理・制御するエージェント技術の展示が印象深かった。エージェンティック AI 的な視点の展示も散見され、今年 3 月にバルセロナで開催された MWC2026 の展示イメージを一部想起させられる内容であった。

AOI は、1.8GHz ESD 対応スマートアンプを前面に押し出した展示を行っていたが、1.2GHz FDX には対応しておらず、昨年来の潮流である所謂 Unified DOCSIS からは逸脱している。理由を聞いた所、FDX は ESD に比較して数倍の開発コストが掛かるため割に合わないとの事で、会社によっての考え方の違いが興味深かった。

CableLabs & SCTE:共催ブースでは、DOCSIS 4.0 の認証・標準化プログラムの最新状況と、次世代規格「Next Gen DOCSIS (3GHz/6GHz)」に向けた相互運用性テストの進捗を公表していたが、今年はブースが小規模なせいもあり、正直言って若干地味な印象であった。

今ケーブルテレビ業界が曲がり角を迎えているという話を、長年業界の重職を担ってきた 2 人から話を聞くことができた。1 人は MSO 出身者、もう 1 人はケーブルラボ関係者。2 人の話を総合すると、①YouTube や Netflix に代表されるストリーミングの攻勢によるビデオ (テレビ) サービス離れ②ストリーミングを支えるブロードバンド加入がピークアウト③株価が下落傾向という観点からの評価によるもの。

Comcast のビデオ 加入者は 2015 年の 2,234 万人が 2025 年に 1,127 万人で約 50%の減少。一方ブロードバンド (インターネット) は同じく 2,333 万が 3,126 万で約 34%の増加。しかし 2026 年 Q1 が 3,081 万、Q2 が 3,077 万と純減に転じている。唯一加入を伸ばしているのはモバイル (携帯) で、2025 年 930 万、2026 年 Q1 が 974 万、Q2 が 1,018 万。さらに Comcast は今年 6 月に NBCUniversal (メディア・コンテンツ) と Sky (英国のブロードバンド) を別会社にして上場することを発表し、ケーブル事業者がコンテンツを保有することの価値がなくなったことを意味している。

一方ニューヨークをエリアに持ち ARPU も業界トップの 150 ドル以上であった Cablevision が 2016 年にフランスの通信グループ Altice に買収され、その前年に買収した Suddenlink を統合し Altice USA として Optimum ブランドでのサービスを行いブロードバンド加入者は 440 万。しかし株価は 2020 年の 37.87 ドルが 2026 年 10 月 2 日には 0.92 ドルに大暴落している。買収や設備投資が巨額の負債になっていると債権者側から追及されているとのこと。Comcast の株価も現在は 21.57 ドルと 2020 年につけた高値 41.17 ドルからはほぼ半減している。

さらに Charter は 2015 年のブロードバンド加入が 560 万であったが、2016 年に Time Warner と Bright House、2026 年に Cox を買収し現在は 3,500 万の業界第 1 位になった。

しかし株価は 2020 年の 284.60 ドル、9 月 4 日の 152 ドルが 10 月 2 日には 109.29 ドルとわずか 1 か月ほどで約 28%下落している。今回 Charter はブランド認知を前面に押し出す戦略で Spectrum として最大のブース出展をし、エッジ AI の導入を主力テーマに、ロサンゼルス Lakers の独自コンテンツ紹介や宅内 WiFi の幅広い自社ブランド製品展示など意気込みは感じられたが、ブース内各テーマに関しての具体的説明がなされておらず、スタッフの説明にのみ委ねるという丁寧さにかけるブース作りにちぐはぐさが感じられ少し残念であった。

TechExpo27 は、コロラド州デンバー市で 9 月 28 日～9 月 30 日の開催予定である。

7. その他

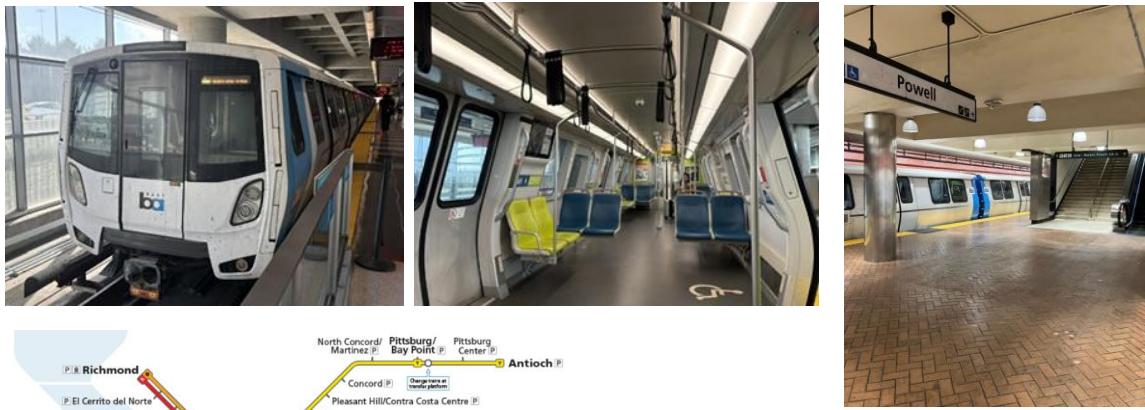
7.1 BART（ベイエリア高速鉄道）への試乗

本ツアーでは TechExpo26 の帰路、カリフォルニア州サンフランシスコに移動して企業視察を行ったが、その際空港とホテル間の移動に BART を利用した。

BART は、サンフランシスコ湾岸地域高速鉄道（Bay Area Rapid Transit – BART）によって運営されている地下鉄と近郊鉄道を兼ねた公共交通である。1972 年に開業し、最も新しい路線や延伸区間としては、2020 年にサンノゼの Berryessa までつながりシリコンバレーへのアクセスが拡張された。レールの幅は 1,686mm と新幹線などが採用している標準軌とよばれる 1,435mm よりも広い。また走行は ATO（Automatic Train Operation）システムによる自動運転だが、運転士が同乗しているのは非常時・異常時への対応。車両はかつてアメリカのローカルメーカーなどが製造してきたが、2018 年からはカナダのボンバルディア（後にフランスのアルストムが買収）製の次世代車両「フリート・オブ・ザ・フューチャー」が投入され、2026 年までに全 1,129 両の導入が完了して旧型車両からの完全リプレイスが進んでいるとのこと。

運賃体系は乗車距離に応じた従量制。移動した距離（およびサンフランシスコ湾を横断するチューブを通るか否か）によって計算され、最低料金の約 2.30 ドルから、空港発着や長距離利用時の最高 10 ドル超まで細かく設定されている。さらに、短期旅行者向けの定額乗り降り自由パス（1 日券など）は基本的に存在しないが、地域共通の IC カード「Clipper（クリッパー）3 ドル」やクレジットカード、デビットカード、Apple Pay、Google Pay を利用することで、自動的に運賃が精算される仕組みになっている。

市民の重要な移動手段として利用されていることは間違いないが、今回の宿泊ホテルの最寄り駅が、サンフランシスコ中心部マーケットストリート沿いの地下駅（Powell）であったが、改札から地上に出る上下 1 基ずつのエスカレータとエレベータが少なくとも滞在中故障のままであったことは、構造的な赤字を抱えていると言われている財政状況を反映しているのかも知れない。



7.2 Waymo（無人自動運転タクシー）への試乗

Google が 2009 年に自動運転システムの開発に着手し、2015 年に世界初の完全自動運転による公道走行を実施できたことを踏まえ、2016 年に「Waymo」という親会社「Alphabet」傘下の独立会社として事業化が始まった。

2016 年に Chrysler の Pacifica Hybrid 車にソフトウェア、LiDAR、カメラ、レーダー、コンピューターを搭載した完全自動運転車を完成させ、2018 年からフェニックスでドライバーが乗車した形でのタクシーサービス「Waymo One」を開始した。

2020 年からはドライバーが乗車しない完全無人化に移行し、2021 年から車両を Jaguar I-PACE に切り替え、2022 年にサンフランシスコでのタクシーサービスを開始した。その後ロサンゼルス、マイアミにサービスを拡大し、オースチン（テキサス州州都）とアトランタは Uber サービスとして導入されている。2026 年 2 月にはこの 6 大都市圏での利用は週 40 万回以上の乗車があると発表している。その後も導入地域がダラス、デンバー、ヒューストン、ラスベガス、ナッシュビル、オーランド、サンアントニオ、サンディエゴ、タンパにも拡大していると発表されている。

2026 年に 160 億ドル（2.5 兆円）の大型資金調達を行い、米国各都市のみならず東京やロンドンなどの海外展開も加速すると発表している。日本では 2025 年から東京都内での公道試験運転が行われ、日本交通や Go と提携し 2027 年から東京都内でのサービス開始を発表している。

現在導入されている車両は Jaguar I-PACE に加え、2026 年から Waymo がカナダの OEM メーカーである Magna に作らせている Waymo Ojai（オーハイ）が、サンフランシスコでは多く見かけられた。そのほかに韓国の Hyundai の車も試験されていると聞く。

実際に乗車してみたが、人が運転する車と変わらない走行で、音声でのシートベルト着用の催促、降車時にドアを開ける際は車接近の注意喚起もあった。目的地に到着すると「停車スペースを探しています」と座席前のモニターに表示されるが、幅よせして停車できるスペースを認知し実行できる完成度は AI 技術だと感心した（同乗者からは「俺の運転よりもうまいなあ」という声も聞かれた）。ただ道幅が狭く路上駐車スペースがない場合には、やむなく走行車線上で停車しての降車になるが、乗客が降車をもたついていると（日本のタクシーはドライバーがドアの開閉を行う）、後ろの車にクラクションを鳴らされ「ロボタクシーは困る」との評判につながることは容易に想像できた。しかしこれは人が運転する車でも同じことなので、社会が偏見なく受け入れることが大切であるとも感じた。

乗車後モニター画面操作でできる機能は次の通り。

操作	内容
乗車開始	車内画面の「Start Ride / 利用開始」を押す
目的地変更	走行中でも目的地を変更できる
経由地追加	途中で Stop を追加できる
空調温度	好みの温度に調整
音楽・Podcast	車内画面またはスマートフォンから再生

操作	内容
音量・音質	音量、Bass/Treble などを調整可能
走行状況確認	車が認識している周囲の状況やルートを確認
停車依頼	必要な場所で Pull over をリクエスト

さらに新型車 Ojai には Google Gemini の音声アシスタントを搭載しているので、乗客は音声で「エアコンの温度を 25 度にして」と要望できる他、周辺の観光スポット、レストラン、走行中の場所についてなどの質問も可能になった。



以上